

身体像に関わる自己構造と心理的適応について

田 中 久 美 子

Self-structure in Relation to Body Image and Psychological Adjustment

TANAKA Kumiko

我々が抱く自己の身体像は、正確に自己の姿を映し出しているであろうか。これまで身体像を測定する様々な尺度が開発されてきたが、最もよく用いられているのはStunkard, Sorensen, & Schulsinger (1980)によるシルエット図で、最もやせている姿から段階的に太くなっていく様子が描かれている。Fig. 1はその一部を示すものであるが、アメリカの男女大学生を対象に「現在の自分の姿 (a)」、「理想の姿 (b)」、「異性に魅力的だと思われる姿 (c)」の他に、「異性のシルエット図を見て魅力的だと思う姿 (d)」の計4つを選ばせた (Fallon & Rozin, 1985)。その結果、男性の場合は (a), (b), (c) の間でほとんど差が見られなかったのに対し、女性はそれぞれの間で差が認められ、特に (a) と (b) との差が顕著であった。この結果が示すように、特に女性の場合、なぜ現実の身体像と理想とする像とは大きくかけ離れてしまうのであろうか。

女性が身体像を形成する上で、体重や容姿に関する文化的な価値観が影響していることは過去の様々な研究の中で明らかにされている (Crandal, 1994 ; Fredrickson & Roberts, 1997)。特に欧米文化圏においては、黒人によるサブカルチャーを除いて (Milkie, 1999)、「女性は美しくあるべき」「やせている姿こそが美しい」といった美に対する性役割的な価値観が、強迫観念的に女性たちの間で広く浸透しているが、このような現象は我が国の特に若い世代においても当てはまるであろう。

身体に関する社会・文化的な価値観を女性が自己の内部に取り込む (内在化する) ときに媒介となる、家族 (Pike & Rodin, 1991)、メディア (Stice, Schupak-Neuberg, Shaw, & Stein, 1994 ; Harrison & Cantor, 1997)、友人関係 (Paxton, Schutz, Rodin, Wertheim, & Muir, 1999) などの外的要因の存在がこれまでの研究で具体化されてきたが、近年フェミニズム的な観点に立つ研究者たちによって、内在化のプロセスやメカニズムを個人内要因から明らかにしようとする動きがある。

Mckinley & Hyde (1996) は、「自己の身体は外から見られる対象として存在する」という女性独特の身体経験を支える3要素を示し、それらを対象化身体意識 (Objectified Body Consciousness : OBC) としてまとめた。まず1つ目は、「身体の監視 (body surveillance)」で、身体に関する文化的な価値基準に照らし合わせて、自己の身体をモニタリングするというものである。

2つ目は「身体の羞恥 (body shame)」で、身体の監視の結果、基準と現実とのズレの経験によるものである。最後は「コントロール信念 (control beliefs)」で、容姿や外見は自分でコントロールできるものという信念を指す。

また、Fredrickson & Roberts (1997) は、女性が自己の身体を社会・文化的な基準との比較で捉えると、自己を性的に対象化するようになるという現象とその過程について、自己対象化理論 (Self-Objectification Theory) を提唱した。この理論に関しても、女性は他者の評価や外的な基準を内在化した結果、基準と現実とのズレを認識し、ネガティブな感情や身体像を形成する。このとき、自分の容姿をコントロールできる (かも知れない) と信じることは、心理的な安定感につながるので、自分のコントロール下に置きやすい体重をそのターゲットとして、食制限によりやせることでズレを低減しようとする。

以上のように、女性の抱く理想の身体像には「やせ志向」と密接な関係があり、また理想像と現実像との埋め合わせとしての体重管理には、先に述べたようなコントロール信念が下支えとなっているようである。そこで、本稿ではまず身体 (主に体重に関わる) 意識とコントロール信念との関係についての研究を概観する。

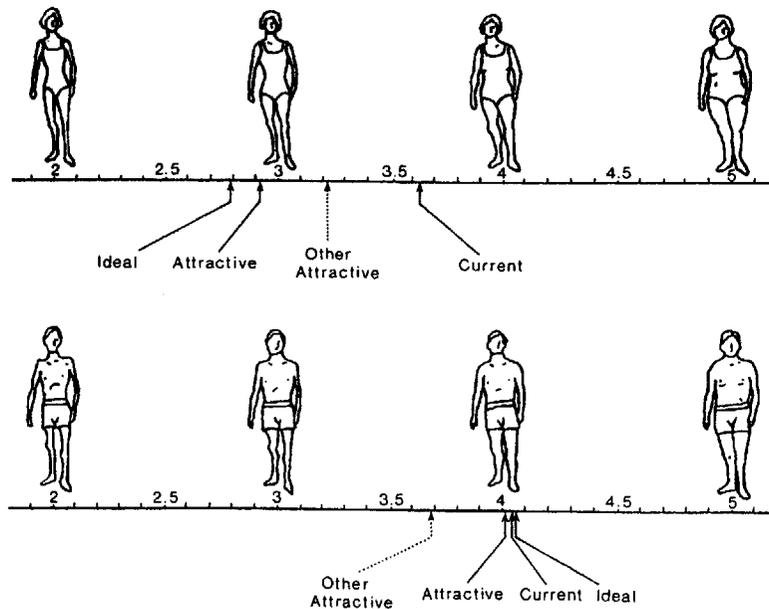


Fig. 1 大学生が選んだ各身体像 (1~9点までの9段階評定) (Fallon & Rozin, 1985)

(上段：女性，下段：男性)

- a. 現在の姿 (Current)
- b. 理想の姿 (Ideal)
- c. 異性に魅力的だと思われる姿 (Attractive)
- d. 異性が魅力的であると判断した姿 (Other Attractive)

1. 自己の身体に関わるコントロール信念

1-1 完全主義

Garfinkel & Garner (1982) によれば、ダイエットはやせて美しくなれるという美容上の理由からだけではなく、それに成功すれば優越感、達成感などの心理的幸福感が獲得できるために行われるのだという。またダイエットにおいて目標とされる美の基準は相当に高く、実現に向けては不断的努力によって体重管理をすることが必要とされるために、勤勉な人や完全性を求めるオーバーアチーパーなどが極端なダイエッターに陥りやすい (Myers & Biocca, 1992)。

こうした観点から, Joiner, Heatherton, Rudd, & Schmidt (1997) は完全主義(perfectionism)が摂食異常の1つである過食(bulimia)傾向にとっての危機的な要因であるかどうか女子大学生を対象に調べた。完全主義者はネガティブなライフストレスが生じない限り抑鬱状態を経験しないという、完全主義と抑鬱の関係について調べた先行研究(Joiner & Schmidt, 1995)の知見に基づき、完全主義的な女性であっても容姿に関する美的水準を満たしていると感じているならば、過食傾向は認められないのではないか、という仮説を立てた。

ところで摂食異常者の多くは、実際の自分の身体が客観的、または医学的に見て正常の域にあったとしても、太っていると認知しやすい(Hebl & Heatherton, 1998)。Joiner et al. (1997)も、実際の体重の値が正常であるかどうかよりはむしろ、自己が知覚する体重状態(太っていると感ずるか否か)の方が完全主義者にとって有意味的であると考えた。そこで、完全主義(高/低)×太っていると感ずる(はい/いいえ)による4群を設定し、過食傾向を比較した(Fig. 2)。

その結果、自分を太っていると感ずる、また完全主義的でもあるD群は他の3群よりも有意に高い過食傾向を示したが、完全主義的であっても、太っていると感ずっていない(=美的基準を満たしていると判断している)B群の過食傾向は低かった。このように、基準に達していないと感ずる完全主義者(D群)に過食傾向が高いという結果から、これは不快な自覚状態(self-awareness)からの逃避としての暴食(binge)(Heatherton & Baumeister, 1991)、また理想自

		完全主義	
		低	高
太っていると感ずるか?	いいえ	A. 10.45	B. 11.04
	はい	C. 11.73	D. 15.03

Fig. 2 群ごとに見た過食傾向の平均値 (Joiner et al., 1997)

(全体の平均値11.08 (SD=5.02))

己と現実自己のズレが抑鬱と結びつくことを示したセルフ・ディスクレパンシー理論 (self-discrepancy theory) (Higgins, 1987) のそれぞれとも関連があるのではないかと、としている。

1-2 イデオロギーによる影響

Quinn & Crocker (1999) も, Joiner et al. (1997) と同様に, 実際の体重値ではなく, 自己知覚した体重状態 (正常, やや太い, かなり太いの3群に分類) に注目し, それがプロテスタント的倫理観や心理的幸福感との間にどのような相互関係があるかを調べた。プロテスタント的倫理観は, 個人主義 (individualism) が優勢なイデオロギーとなるアメリカにおいては核となる価値観で, 勤勉こそが成功をもたらすと考えられている。そして, この倫理観を支持し, 実践することで心理的な幸福が得られるとしている。そのためこの倫理観の下では, 太っている人に対しては, 自己の努力次第でコントロール可能な体重を管理できない (Crandal, 1994), 「意志薄弱な怠け者」という烙印が押されてしまうのである。こうした文化的な背景を踏まえ, Quinn & Crocker (1999) の実験1では自己知覚した体重状態とプロテスタント的倫理観を支持する程度が, 特性としての心理的幸福感にどのような影響を与えるか検討した。その結果, 自分をかなり太っていると感じる者はプロテスタント的倫理観を強く支持しているが, 支持が高いほど心理的幸福感は逆に低下することが示された。しかし正常者の場合, これとは全く対照的なパターンを示した。

続いて実験2では, アメリカ人にとって個人主義と並ぶもう一つのイデオロギー, 平等主義 (egalitarianism) に注目した。イデオロギー研究 (Katz & Hass, 1988) で, 人は平等主義を意識すると, 社会的に差別を受けている集団に対して, よりポジティブかつ共感的に対応するようになるということが明らかになっている。それゆえ, プライミングとしてプロテスタント的倫理観, 平等主義に関する内容の各メッセージを予め与え, その後で心理的な幸福感及び, 自尊心を評定させた。その結果, 正常群ではプライミング内容による差はなかったが, 「かなり太い」群では差が認められ, 「平等主義的」がプライミングとなった後では, 一時的なものであるにせよ, 心理的幸福感, 自尊心がともに高まることが示された。

以上のことから, 自分を太いと感じている者はイデオロギーによる影響を受けやすく, 特にプロテスタント的倫理観のような価値観を支持するほど, 自己統制力が強化されて自己の体重を一層厳しく管理しようとするために, 摂食障害などを引き起こすのではないかと危惧されている。

2. 自己情報の統合

前節に挙げたような身体意識の負の結果として, 身体像の歪みや摂食障害といった問題を訴える女性が数多く存在するが, このような女性の場合, 自己全般にわたる評価も極めて低いのが特徴である (田中, 1999a)。前節の「コントロール信念」は彼女たちにとっては容姿だけではなく自己全般にわたって広く適用されるものであろう。こうしてみると, 自己の構成要素の1つとしての身体は, 彼女たちの「自己」の中でどのように位置づけられて, 他の構成概念や

自己全般に影響を与えているのかを明らかにする必要がある。ところで最近では、これまで主に臨床心理学の領域を中心にして扱われてきた問題が、認知的な知見とも併せて社会心理学の領域などでも取り上げられるようになってきている。尤もそこで対象となるのは、臨床的に見て問題となるレベルの人々ではなく、正常域の一般人であることが多いのだが、その中で異常傾向を質的に分類し、認知過程の違いを解明しようと試みられている。

そこで第2節では、摂食異常（傾向）者に特有とされる否定的な身体像を認知的な歪曲によるものと捉え、異常（傾向）者の認知プロセスや情報処理プロセスを考える上で有用な自己認知モデルについて概観し、否定的な身体像が形成されるメカニズムと心理的適応への可能性について検討する。

2-1 多次元的な自己構造

自己の多面性、多次元性は、自己概念の内容（content）と構造（structure）という2つの観点から捉えられてきた（Linville, 1987）。前者の「内容」とは、自己に関する情報の全体量や情報価（ポジティブ／ネガティブ）といった情報の質を指すもので、特に情報価はそれに関連する気分や経験によって規定される（Sedikides, 1992）。一方、後者の「構造」は、自己関連的な知識（情報）を統合するカテゴリーを基本単位とするもので、そのカテゴリーの数や種類が全体的な自己構造を決定づける。

多次元的な自己観においては、自己に関する情報の質・量といったその内容よりはむしろ、それらがいかにか有機的に結び付いて全体的に統合されるのかといった構造面が重要になってくる。またこれに加えて最近では、様々なメンタルヘルスのストラテジーとなり得るような自己構造の在り方についても検討が進められている。そこで、この構造上の特徴3点を以下に列挙し、自己情報の統合という認知的な観点から心理的適応への可能性を探る。

2-2 自己構造の特徴

（1）自己複雑性

自己複雑性（Self-Complexity）とは、複数のカテゴリーに重複する属性を持たないよう、明確に相互分化したカテゴリーが多数存在するような自己の状態を指す（Linville, 1985, 1987）。このようにカテゴリー間が意味的に区分されているため、あるカテゴリー内のネガティブな属性が活性化されたとしても、その影響が他のカテゴリーにまで伝播する可能性の極めて低いことが自己複雑性の利点といえる。これに関するLinville（1987）の実証的研究においても、自己複雑性の高い者は、ストレス経験前後でのネガティブ気分の変動が小さく、カテゴリー相互の特徴的な構造が緩衝的役割を果たすことがわかっている。

（2）重要性の相違

Pelham & Swann（1989）は、カテゴリーに対してポジティブに感じる程度とその重要性との間に相関のあることを認め、ポジティブ／ネガティブ各カテゴリー間に重要性の相違（differential importance）があるとした。このように、一般的にポジティブカテゴリーはネガティブなそれと比べてより重要であると認識され、これが肯定的な自己評価へとつながるが、ネガティ

ブな気分を経験によりネガティブカテゴリーが活性化されてその重要性が高まると、ポジティブカテゴリーとの重要性の相違は小さくなってしまふ。

(3) 区画化と統合化

Showers (1992) は、カテゴリーを構成する情報が一様にポジティブ、あるいはネガティブといったような、ポジティブ/ネガティブ情報がそれぞれ別々のカテゴリーに分離される区画化 (compartmentalization) と、それらが同一カテゴリー内に混在する統合化 (integrative) という2種の情報統合モデルを想定し、各カテゴリーの活性化とその重要性の程度が自己に関する全体的なポジティブ・ネガティブ各情報へのアクセシビリティに違いをもたらすと考えた。

これによると「区画化」の場合、ポジティブ情報からのみ成るカテゴリーが自分にとって重要なものと見なされ頻繁に活性化されるならば、それはポジティブな自己評価をもたらすことになるが、反対にネガティブ情報のみで構成されるカテゴリーが重要かつ活性化されると、自己に対するネガティブ感情は最大となり自己評価も低下する。このため、後者のようにネガティブカテゴリーが重要とされるような場合には、1カテゴリー内にポジティブ・ネガティブ情報がともに存在する「統合化」の方が、ネガティブ情報へのアクセスを最小限に食い止めることができるという意味で、「区画化」より効果的な手段といえる。ただ最近では、ネガティブカテゴリーであってもその重要性が高くなければ、認知的な資源や努力を「統合化」ほど必要としない「区画化」でも対応できるとしている (Showers & Kling, 1996)。

以上のことから、自己関連情報の適応的な統合のために、ポジティブ情報にはネガティブ情報と完全に切り離す区画化が、またネガティブ情報には、重要性においてそれを上回る同一カテゴリー内のポジティブ情報との統合化が望まれることとなる。

このモデルに関する実証的研究として Showers & Larson (1999) は、女子大学生を対象に摂食異常徴候の有無と自己の身体への満足度の2点から3群に分けて、自己の身体に対する意識 (身体に関するカテゴリー) が全体的な自己統合にどのような影響を及ぼすかについて調べた。

被験者には、自己概念の内容とその構造を測るためのカード分類 (card sorting) という課題が与えられた。これは Linville (1985, 1987) が自己複雑性を測定するため開発した課題の改良版ともいえるものであり、自己を記述する特性形容詞が1語ずつ書かれた54枚一組のカードを被験者自身が自由に想定した自己を表現するカテゴリーに応じて分類していく作業である (同一カードが複数のカテゴリーに含まれても可)。本来のカード分類では、40枚 (ポジティブ、ネガティブ各20語) を1組としているが、この研究では自己の容姿に関わる形容詞6語 (魅力的な、スリムな、健康的な、魅力的でない、太った、きゃしゃな) と摂食異常の心理状態に関わる8つの特性語 (コントロールの効かない、罪悪感の、など) を特別に加えて計54枚を1組にしている。カード分類終了時には各カテゴリーの重要性を評定させた。またこの実験目的から、カード分類課題で被験者が身体に関するカテゴリーを設定している必要があるため、自発的に身体カテゴリーを想定していなかった被験者に対しては、課題終了後に実験者の要請でこのカテゴリーを想定してカードを分類し、その重要性についても評価するよう教示した。

その結果、自発的に身体カテゴリーを想定していた割合は群間で差はなかったものの、摂食異常徴候があり自己の身体に不満を感じている群 (以下、異常群) では、他の2群 (異常傾向

はないが、身体への不満がある群／異常傾向、身体への不満ともに無しの正常群）に比べて容姿カテゴリーは自分にとって重要であると判断していることが示された。また、異常群では使用したネガティブ語の割合が身体カテゴリー内で76%（他の2群はいずれも30%未満）を占め、容姿に関するネガティブ語が区画化的に構成されている上、身体カテゴリーで使用されたのと同じネガティブ語（例：「太った」「魅力的でない」など）が、他のカテゴリーでも繰り返し認められた。さらに、他の2群では重要と評価されたカテゴリー内のポジティブ語は区画化的に、ネガティブ語は統合化的に、といった具合に情報統合を効果的に使い分けてカテゴリー構成を行っているのに対し、異常群では全く逆の情報統合パターンが確認された。つまり、摂食異常徴候があり否定的な身体像を抱く者にとって、当然のことながら自己の容姿に対してネガティブな感情が大部分を占めるだけでなく、それらが自己全般にも同じように蔓延し、他のポジティブ感情との均衡が図られていないのである。

2-3 自己構造からみた適応への可能性

ストレスやネガティブな気分を経験したとき、それらが自己に与える衝撃を和らげるための対処法として、自己構造はどのように機能するのだろうか。Showers, Abramson, & Hogan (1998) は、大学入学直後の最もストレスの感じやすい時期（時期1）と、大学生活も落ち着いてきて比較的ストレスが少ないと思われる時期（時期2）を選び、2年半の時間間隔を置いて同一被験者を対象に調査を行った。個人差要因として、抑鬱傾向（高／低）とストレス程度の違いによる気分変動の大きさ（大／小）を取り上げ、時期1、2での自己構造を上記の3特徴ごとにその変化の様子について検討した。

その結果、まず自己複雑性は低ストレス時（時期2）においてのみ顕著に認められたことから、ストレスレベルが低い、あるいは自己内容が比較的ポジティブな状態、と制限した上で自己複雑性はストレスやネガティブ気分の緩衝的な役割を果たすといえる。

次に、重要性の相違という点では、抑鬱傾向の低い者はストレス時であっても、ストレスと関わるネガティブカテゴリーを重要とは見なしていない、つまり重要性の相違を保持できていることが示された。

最後に、抑鬱傾向が低く気分変動の大きい群は、高ストレス時（時期1）でのカテゴリーの区画化を最も頻繁に行っていた。この群は高ストレス時でもポジティブ、ネガティブカテゴリーに対して重要性に明確な違いを持ち、ポジティブなカテゴリーほどより重要であると判断していた。そのため「区画化」を行うことは好都合であるといえる。

まとめ

本稿は、摂食異常傾向者に関する諸研究を通じて、否定的な身体像が形成される上で特徴的な認知構造、またそのメカニズムを明らかにし、適応への可能性について検討しようとするものである。

一般に、女性は自己を過剰統制しようとする傾向が高い（Stice et al., 1994）と指摘されるよ

うに、容姿に関わる文化的基準に自己を近づけようとする女性が多い。しかし、その基準を達成困難なものと感じるかどうかが、またそのように感じたとき、達成できない自分にどのような評価を与えるか、を決定づけるのは認知過程における質的な差違であるといえる。

本稿でレビューした研究から、摂食異常傾向の高い者は概してネガティブに偏った認知パターンを持つことが窺える。以下にその特徴を列挙する。まず第1に、彼女たちは自己の体重の実測値とは関係なく自分を太っていると感じている。女子高校生を対象に行った研究(田中, 1999b)を再分析し、自己知覚された体重状態とBMI²との関係を調べたところ、自分をやせていると感じている者の示すBMIはいずれも19.8未満で、これは肥満学会の定める「やせ」の域に属するものであった。ところが、自分を「やや太っている」、または「かなり太っている」と感じている群のうち、BMIの基準で「やせ」の域に入る者の割合はそれぞれ61%、23%を占めていた。このように、自分を太っていると感じる者は、実際の体型に則して体重状態を認知していないことがわかる。

第2に、自己を構成する多くの他の側面と比べて、身体をより重要な要素と位置づける一方で、身体に対する評価は極めて低いために、否定的な身体像を形成しやすい。これは、Showers & Larson (1999)の研究でも明らかのように、量的に見てネガティブ情報がポジティブ情報をはるかに凌ぐという区画化的な情報統合が身体カテゴリー内で行われていることとも関係があるだろう。

第3に、身体に対する意識や感情が、身体とは直接関係がないと思われる他のカテゴリーでも繰り返し出現している。これはLinville (1985, 1987)の言葉を借りれば、自己複雑性の低い状態であり、ネガティブ情報に満ちた身体カテゴリー内で行われているのと類似した情報処理様式が他のカテゴリーにも波及して、結果的に全体的な自己評価の低下を招いているのであろう。

以上のことを踏まえ、摂食異常傾向者の心理的な適応のために、自己の認知構造について再考してみよう。まず彼らは、身体というカテゴリーを核にした独特の自己構造を持ち、その構造を支える各側面(カテゴリー)は、主としてネガティブ情報によって統合されている。この構造上の問題点は、ポジティブ情報の少なさと、ポジティブ・ネガティブ情報の統合様式にあると思われる。そこで、まずは自己構造の中心をなす身体カテゴリー内に占めるポジティブ情報の増加が望まれる。それによって、ネガティブ情報との量的な不均衡が改善される上、相互の情報が統合的に処理されることで、ネガティブ情報のインパクトを抑えることが期待できるからである。

それでは、身体カテゴリー内のポジティブ情報を増やすためにはどのような試みがあるだろうか。Niedenthal, Setterlung, & Wherry (1992)は、Linville (1985, 1987)の自己複雑性に、現在、過去、未来といった時制(tenses)という新たな視点を加えて、自己を捉え直そうとした。Niedenthal et al. (1992)は第3実験で、現在と未来の自己複雑性を量的に比較したところ、被験者のうち43%は未来における自己複雑性の方が高く、現在よりも未来の自己について多くのカテゴリーを想起していることを示す結果となった。これに関してNiedenthal et al. (1992)は、この種の被験者は現在の自分に満足していないために将来に夢を馳せるドリーマー的な傾

向があるのではないかと考察している。冒頭に紹介したFallon & Rozin (1985)の研究結果でも明らかなように、女性は男性に比べると、確かに現実の身体像をネガティブに評価しがちではあるが、理想像は現実とはかなり開きのあるものをイメージしている。それが実現可能かどうかはさておき、Niedenthal et al. (1992)同様に未来の自己像を想起させたならば、そのときの身体像は現在の姿よりは理想像にもっと近いものが描かれるであろうし、恐らく彼女たちにとって、それはポジティブな姿と判断されるであろう。これはもちろん推測の域ではあるが、自己のカテゴリー形成において現在とは異なる時間軸で自己を捉えるということも意味的であると思われる。

またもう一つの提案として、身体カテゴリーへの偏った価値の重み付けを避け、他のカテゴリーへも価値を分散させるなどして、自己構造内での身体カテゴリーの比重を低下させることが必要である。なぜなら、たとえネガティブ情報から構成されるカテゴリーであっても、それが重要であると判断されないならば、自己全体に与えるダメージも小さくなるからである。

自己対象化理論を提唱したFredrickson & Roberts (1997)は、女性に課せられる美に関する文化的な基準が変わらない限り、女性は自己対象化過程を通じて経験する否定的な身体像にいつまでも苦しめられ続けるのではないかとまとめている。しかし、本稿で取り上げたような摂食異常傾向者の認知過程や情報処理過程を理解し、またそれとの対比により正常者の認知過程を知ることによって、自己対象化の最終段階とされる、摂食異常をはじめとする「メンタルヘルスの危機」を回避することはそれほど困難なことではないように思われる。

謝 辞

本稿作成に当たり、御指導を賜りました京都大学大学院教育学研究科子安増生教授に深く感謝致します。

註

- 1 : 体重 (kg) ÷ 身長 (m) ÷ 身長 (m) で求める体格指数 (body mass index)。国際的な基準として用いられ、日本肥満学会でもその標準数値としてBMI22を提唱している。

引用文献

- Crandal, C.S. 1994 Prejudice against fat people: Ideology and self-interest. *Journal of Personality and Social Psychology*, 66, 882-894.
- Fallon, A.E., & Rozin, P. 1985 Sex differences in perceptions of desirable body shape. *Journal of Abnormal Psychology*, 94, 100-105.
- Fredrickson, B. L., & Roberts, T. 1997 Objectification Theory: Toward understanding women's lived experiences and mental health risks. *Psychology of Women Quarterly*, 21, 173-206.
- Garfinkel, P.E., & Garner, D.M. 1982 *Anorexia nervosa: A multidimensional perspective*. New York : Brunner/Mazel.
- Harrison, K., & Cantor, J. 1997 The relationship between media consumption and eating disorders. *Journal of Communications*, 47, 40-67.
- Heatherton, T.F., & Baumeister, R.F. 1991 Binge eating as escape from self-awareness. *Psy-*

- chological Bulletin*, 110, 86-108.
- Hebl, M.R., & Heatherton, T. F. 1998 The stigma of obesity in women: The difference is black and white. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 24, 417-426.
- Higgins, E.T. 1987 Self-discrepancy: A theory relating self and affect. *Psychological Review*, 94, 319-340.
- Joiner, T.E., & Schmidt, N.B. 1995 Dimensions of perfectionism, life stress, and depressed and anxious symptoms: Prospective support for diathesis-stress but not specific vulnerability among male undergraduates. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 14, 165-183.
- Joiner, T.E., Heatherton, T.H., Rudd, M.D., & Schmidt, N.B. 1997 Perfectionism, perceived weight status, and bulimic symptoms: two studies testing a diathesis-stress model. *Journal of Abnormal Psychology*, 106, 145-153.
- Katz, I., & Hass, R.G. 1988 Racial ambivalence and American value conflict: Correlational and priming studies of dual cognitive structures. *Journal of Personality and Social Psychology*, 55, 893-905.
- Linville, P.W. 1985 Self-complexity and affective extremity: Don't put all your eggs into one cognitive basket. *Social Cognition*, 3, 94-120.
- Linville, P. W. 1987 Self-complexity as a cognitive buffer against stress-related illness and depression. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 663-676.
- Mckinley, N.M., & Hyde, J.S. 1996 The objectified body consciousness scale: Development and validation. *Psychology of Women Quarterly*, 20, 181-215.
- Milkie, M.A. 1999 Social comparison, reflected appraisals, and mass media: The impact of pervasive beauty images on black and white girls' self-concepts. *Social Psychology Quarterly*, 62, 190-210.
- Myers, P.N., & Biocca, F.A. 1992 The elastic body image: The effect of television advertising and programming on body image distortions in young women. *Journal of Communication*, 42, 108-133.
- Niedenthal, P.M., Setterlund, M.B., & Wherry, M.B. 1992 Possible self-complexity and affective reactions to goal-relevant evaluation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 63, 5-16.
- Paxton, S.J., Schutz, H.K., Rodin, J., Wertheim, E.H., & Muir, S.L. 1999 Friendship clique and peer influences on body image concerns, dietary restraint, extreme weight-loss behaviors, and binge eating in adolescent girls. *Journal of Abnormal Psychology*, 108, 255-266.
- Pelham, B.W., & Swann, W.B. 1989 From self-conceptions to self-worth: on the sources and structure of global self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 672-680.
- Pike, K.M., & Rodin, J. 1991 Mothers, daughters, and disorderd eating. *Journal of Abnormal Psychology*, 100, 198-204.
- Quinn, D., & Crocker, J. 1999 When ideology hurts: Effects of belief in the protestant ethic and feeling overweight on the psychological well-being of women. *Journal of Personality and Social Psychology*, 77, 402-414.
- Sedikides, C. 1992 Changes in the valence of the self as a function of mood. *Review of Personality and Social Psychology*, 14, 271-311.
- Showers, C.J. 1992 Compartmentalization of positive and negative self-knowledge: keeping bad apples out of the bunch. *Journal of Personality and Social Psychology*, 62, 1036-1049.
- Showers, C.J., Abramson, L.Y., & Hogan, M.E. 1998 The dynamic self: How the content and structure of the self-concept change with mood. *Journal of Personality and Social*

Psychology, 75, 478-493.

Showers, C.J., & Kling, K.C. 1996 Organization of self-knowledge: Implication for recovery from sad mood. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 578-590.

Showers, C.J., & Larson, B.E. 1999 Looking at body image: The organization of self-knowledge about physical appearance and its relation to disordered. *Journal of Personality*, 67, 659-700.

Stice, E., Schupak-Neuberg, E., Shaw, H. E., & Stein, R. I. 1994 Relation of media exposure to eating disorder symptomatology: An examination of mediating mechanisms. *Journal of Abnormal Psychology*, 103, 836-840.

Stunkard, A., Sorensen, T., & Schulsinger, F. 1980 Use of the Danish Adoption Register for the study of obesity and thinness. In S. Kety (Ed.) *The genetics of neurological and psychiatric disorders* (pp. 115-120). New York: Raven Press.

田中久美子 1999a なぜ、女性は容姿にこだわるのか？ 京都大学大学院教育学研究科紀要第45号，162-171.

田中久美子 1999b 被服が身体意識に及ぼす影響 ～自己対象化に基づいて～ 日本社会心理学会第40回大会発表論文集，178-179.

(博士後期課程3回生，教育心理学講座)